

教科でキャリア教育

宇和高校（愛媛・県立）

第44回
英語

今号の
先生

英語科
加藤耕平先生

学生のときにワーキング・ホリデー制度を使ってカナダに留学、現地の語学学校でCLT (Communicative Language Teaching) を学ぶ。卒業後、愛媛県の高校教員に。SNS では愛媛県の教員で学び合うコミュニティも運営。中学校からバドミントンを始め、社会人になった今も親しんでいる。

やりたいことに足場をかける英語学習で 目的をもって楽しみながら成長する人へ

思考力や発信力を鍛え
英語に対する意欲も伸ばす

2年生でクラス編成された当初、生徒の大半は英語を苦手とし、勉強に自信をもてずにいたのに、3年生の終盤には様変わりした例がある。クラスの18人中12人が英検準2級に合格、うち7人は2級にも合格するほど、皆が勉強に前向きになったのだ。愛媛県立宇和高校で、そんな生徒たちと、英語教員として2年間を共に過ごしたのが加藤耕平先生だ。卒業が近づいた生徒たちへの最後の英語の授業。加藤先生は、何度も行ってきたOM (One-Minute Monologue) Trainingから授業を開始した。本日のトピックとして英語で問いかける。

「外国語をものにしたいなら、海外に出て勉強すべきだ。同意する？ しない？」

生徒たちはワークシートを活用しながら、その意見に対する賛否から、自分がそう思った理由までを英語でメモする。次いでペアを組み、交互に1分間のスピーチを行う。その際は「発する単語数を増やす」ことにも挑むので、事前に「50語以上」「100語以上」と目標も宣言する。スピーチが始まると、話し手は単語数を増やそうとメモを見ながら話をつむぐ。聞き手はその話に耳を傾けつつ、ワードカウンターの用紙を使って単語数を数える。終了のアラームが鳴ると、「もう終わり!？」とでも言いたげなどよめきや、笑い声がそこかしこで起きた。続いて行うのは、ペア同士でのフィードバックだ。

「(語数を増やしたい) 気持ちはわかるけど、もうちょっと落ち着いて(笑)」

「In conclusion (結論として) の言い方で締めたらワードも増えてよかったかも」
そうしたフィードバックを基に、相手を変え、再度1分間スピーチを行う。

「OM Trainingの一番の目的は、自分で考える力や、発信力を高めることでした。話し合うトピックには、英検2級で扱われた題材を毎回使いました。模試で似た問題が出ることも多く、結果としてテストの点数も伸びて、その成功体験が生徒の学習意欲も押し上げてくれました」

英語のゲームを楽しみ
自己調整力も高める

中盤で行ったのは、生徒にとってはおなじみのゲーム形式の学習。おのおのが手持ちのスマホかタブレットでネット上の専用ルームに入り、みんながつながった状態で、複数の英語アプリを楽しむ。

定番となっているのが、英単語学習の機能が豊富なアプリ「Quizlet」を使った早押しゲームだ。画面に示された英単語の意味を4枚のカードのなかから選び、ほかの人より素早く正解を押せば1点獲得、12点先取で勝ちとなる。ただし、お手付きをすると獲得点数は0に戻る。なので、焦りは禁物。個人戦のほか、複数人で協力して12点先取を目指すチーム戦があり、教室前方のプロジェクトアールタイルで示されるので、特にチーム戦では、みんなの熱気もおのずと高まっていく。



「みんなつながって学ぶため」や「自分の思いを伝えやすくするため」にスマホやタブレットも授業でフル活用。



トピックを語る活動では、賛否から補足説明を広げるワークシートを使って考えをまとめる。この活動は、島根県立安来高校の緒方 孝先生の実践を参考にアレンジしたものだという(ワークシート [ダウンロード可](#))。

「いけるんちゃうん!？」

「(お手付きをして)やってもうたあ!」

「ごめん!ごめん! 私間違えた!」

抜きつ抜かれたの接戦のすえに勝利チームが決まると、ワツと歓声が上がった。

『Quizlet』は単語カード集も作れるので、生徒用のセットを作り、自習もできるようにしています。そのうえで授業でゲームをすると、盛り上がりやすく、勝ちたいので自習も増えるんです(笑)。選択問題からより難しい文字入力問題に進めたり、間違えた単語だけ見返したりと、アダプティブに(個に応じて)学ぶ機能もあります。こうしたツールも活用し、自分で学習を振り返り、工夫しながら学ぶという、メタ認知能力や自己調整能力も高めてほしい、と思っているんです」

どんなことをなせたいのか 自分の思いを英語でプレゼン

授業の後半、最後に取り組んだのは、生徒自作の資料を用いたプレゼンだ。

「大学や専門学校でやりたいことを2つ以上挙げ、動機や意義を述べてみよう」

生徒たちは今日までの期間に、このテーマについて自分の考えを英語で原稿にしたため、タブレットでプレゼン資料も作成してきた。プレゼン前の最終確認として、それぞれが自分の原稿を音読した。そのうえで加藤先生が英語で投げかけた。

「原稿を読む、ということではないよ。アイコンタクトや、ジェスチャーも使い、あなたの思いを相手に届けてください」

ペアを組んで1人2分間のプレゼン。あ

る生徒は「課外活動とかアルバイトとかクラブ活動とか、たくさんのかを経験したい」と語った。その経験が自分を成長させると思うから、と。別の生徒は、観光地やグルメのイラストと共に「友達と思いい出をいっばいくりたい」と語った。高校でも友人と過ごした時間がかけがえのないものだったから、と。ほかにも「ボランティアをしたい」「旅行をしたい」「栄養学の勉強をしたい」「人間関係を大事にしたい」など、それぞれの生徒が英語で自分の思いを語り、相手の思いも受け止め、最後に感想を言い合った。

英語を使う楽しさを発見し よりよいあり方を目指す

英語を学ぶこと、英語で伝え合うことを、生徒がここまで楽しめるようになったのは、これまでの経験の賜物でもある。当初は自由英作文の「書き方がわからない」という生徒が多く、AREAの型(Assertion(主張)・Reason(理由)・Example/Explanation(具体例・根拠)・Assertion(主張))のライティングをくり返した。教科書の内容を自分の言葉と4コマの絵で伝えるリテリングや、OM Trainingにも取り組み、自分で考えて表現することにも慣れていった。

2年生の夏の終わりからは、アメリカ・ユタ州の2校の高校生と約半年間オンラインでやり取りし、年度末にはハワイ州の高校生ともオンラインで交流した。

3年生の受験対策の授業では、長文を読んでその内容と合致するものを4択か



「Quizlet」で勝利チームが決まった瞬間。加藤先生の授業には至るところに「楽しい!」と思える要素が組み込まれている。

ら選ぶ問題に挑戦。そのあとで必ず、各選択肢が、内容の言い換え(正答・内容のすり替え(誤答)・内容の記述なし(誤答)のどれに当てはまるか生徒同士で話し合い、「自分で考えること」と「ほかの人の視点にふれること」を続けてきた。

さらに学期ごとに、自分がどんなチャレンジをしたいかを各自ワークシートにまとめ、卒業前には進学先でやりたいことも考えるなど、「自分で目的を立ててそこに向かう」ことも積み重ねてきた。

「英語の技能だけ伸ばすなら、課題を出して僕が全部添削するほうが早いかもしれませんが。ですが、英語学習を通して、多様な人と関わる面白さを知るなど、自分にとつての『楽しい』を発見し、その幸せを得るために何ができるか考えて行動していく——いわばWell-being(よりよいあり方)に向かっていく姿勢も育てたいんです。そうであつてこそ、生徒が自分未来を切り拓いていけると思うので」

● INTERVIEW・教科を越えたつながり



言語活動やICT活用で これからの授業の スタイルを模索

国語科
河原将太先生

加藤先生には、担任したクラスの生徒たちが英語の授業でお世話になっています。2年生に対して英語ディベートの授業に取り組まれた年度もあり、その際は翌年度に私がホームルームの時間を使って、3年生になった生徒たちに日本語ディベートの授業を展開することができました。また、加藤先生は以前からICTの活用にも積極的だったので、コロナ禍で生徒が学校に来られなくなったときは、その実践を真似ることで、オンラインでの国語の音読学習を組み立てることができました。

一番共感しているのは、旧態依然とした授業を続けようとはせず、新しい授業のスタイルを模索されていることです。ガジェット（電子機器小物）がこれだけ発達し、世界とつながれるようになった今、どんな学習が可能なのかと。それも、生徒に地道な声かけをしながら取り組まれている印象があります。

私自身が課題に思うのは、便利なツールが増える一方で、生徒のやるべきタスクも増大していることです。加藤先生が開拓された手法を参考にしながら、私も合理的でシンプルなやり方を検討し、力を合わせていければと思っています。

授業ができるまで

大学受験を控える生徒に 楽しさ重視の授業でいいのか

中学生のとき、塾の先生の英語の発音を「かっこいい！」と思い、興味をもったこと。高校生のとき、英語の先生の留学体験談に魅了され、「自分も海外に行く」と決心し、英語力を磨いたこと。大学生のとき、カナダに1年留学し、「英語で異文化の人とコミュニケーションを取るのってこんなに楽しいのか」と体感したこと。加藤先生にとって英語とは、いつもわくわくする目的をもって学ぶものだった。だから高校の教員になったとき、授業で何よりも伝えようとしたのは「英語を

使うことの楽しさ」だったという。

もともと、初任校にいた3年間は、その方針でいいのか、葛藤することになる。

校内には、運動をがんばる生徒から、大学進学を目指す生徒まで、多様な生徒がいた。ぶつかった壁の一つは、勉強が苦手な層に「英語嫌い」の生徒が想像以上に多かったことだ。そうした生徒たちがどうすれば英語を楽しめるようになるのか、加藤先生は試行錯誤した。

より大きな壁は、進学を目指す層から「楽しさ」以上に「受験のため」の授業を求められたことだ。加藤先生は受験対策の授業もしながら、それでも英語を使う楽しさを届けようとした。結果、どうなったか。担当した生徒たちは受験でも力を発揮してくれた。でも加藤先生の胸中は複雑だった。

「自分が頼りないから、生徒が勝手に勉強してくれたようにも感じていて、授業の方針に自信をもてずにいたのです」

よりよい授業にする鍵は 生徒の話のなかにあった

軸が定まったのは現任校に来てからだ。

20人前後の少人数クラスになり、今まで以上に生徒の一人ひとりの話に耳を傾けた。英語でどんなことをしたいか。何に悩んでいるか。そのうえで、生徒がやりたいことに向かえるよう「足場をかける」ように学習方法を伝えていった。すると、それぞれに英語を学ぶことを楽しみだし、模試の点数も伸びていき、さらに伝えたこと以外の勉強まで生徒が自分で取り組むようになったのだ。

「英語を楽しむこと、受験で問われるような学力をつけること、主体的に学ぶこと。それらは必ずしも相反するものではなく、全部つながるものなんだ、ということ

とを、生徒たちが教えてくれたのです」

では、どんな生徒にどういう足場があるかと楽しく学べるだろう。加藤先生は教育の専門書を読みあさり、各地の研修にも積極的に参加し、共に学ぶ教員のネットワークも築きながら、授業の実践手法を磨いていった。

授業の工夫の一つとして、疑似ではない本物の英語「コミュニケーション、つまりは国際交流を生徒が楽しめるようにしたい」ともずっと思っていた。できることを探していると、教員仲間が「Global Classmates」という、原則費用のかからない交流プログラムを教えてくれた。日米の高校生が、英語と日本語の両方で、半年間にわたり、メッセージや写真、ビデオのやり取りをする活動だった。応募して審査をクリアし、2019年度から取組がスタート。2021年度には、愛媛県のオンライン交流事業の話も無い込み、国際交流の機会がさらに広がった。



英語を楽しめるようにする工夫の一つがICT活用。「Blooket」と呼ばれるゲーミフィケーションサイトも活用。



「Global Classmates」では、オンラインでアメリカの高校生と交流したあと、生徒一人ひとりがお土産交換もした。



ハワイ州の高校生とのオンラインでの交流。互いの国の文化や、地元のことを紹介し合い、質疑応答も楽しんだ。

宇和高校(愛媛・県立)



School Data

創立1908年／普通科・生物工学科 生徒数200人(男子94人／女子106人)
進路状況(2023年3月卒業) 大学22人、短大5人、専門学校等20人、就職12人

Outline

教育理念は「大地と共に心を耕せ」。少人数学習や個別学習を積極的に取り入れ、個に応じた学習支援や進路指導を実施。また、グループワークやペアワークなど対話的な協働学習を重視し、話す力、書く力、聞く力などの育成を図っている。

生徒はこう変わる

目的をもって英語を学び 努力や挑戦を楽しんでいく

一連の英語学習がもたらしたことは、英検の合格といった成績面の変化にとどまらない。生徒の振り返りシートからは、英語や物事に対する向き合い方そのものが変わってきたことが見て取れる。

「英語が嫌いすぎて放置していたのに、今では本当に好きになりました。…(国際交流で)外国に友達ができるのも思っていますでした。大人になったら会いにいくので、英語もちゃんと勉強します」

「英語はやっても伸びないと思っていた。その自分が英語を主に使う学科に入るほど英語好きになるとは思っていま

ませんでした。大学でもがんばります」

「英語は難しく、興味ありませんでした



アメリカの高校生からのお土産を前に記念撮影。プログラム終了後も、交流した相手とSNSでやり取りしている生徒もいる。

○ 生徒INTERVIEW

英語を学ぶことが楽しくなり コミュニケーション力や挑戦心も高まった

赤松さん 英語は読めないし、書けないと思っていたんですが、加藤先生の授業で単語を覚え、英作文するなかで「やりきる」自信が付き、受験も英語を使う入試で突破できました。国際交流で互いの紹介をしたのが楽しくて、今は、愛媛の観光業を盛り上げる未来を目指しています。

土居さん 英語は嫌いでした。ただ、人と話すのは好きで、だから加藤先生の授業のペアワークや国際交流は楽しくて、おかげで英語も好きになりました。将来は体育教師になりたいので、高校で磨くことのできたコミュニケーション力を活かして、今後も学び続けたいと思っています。

清水さん 人見知りで、外国の人に話しかけるのは無理と思っていた。でも加藤先生の勧めでサマーキャンプに参加したら自信が付き、授業の国際交流も積極的に関われたんです。将来は父の事業を国際展開してみたい、とか、前なら躊躇していたことにも踏み出しくなりました。



左より、3年生の赤松統悟さん、土居元氣さん、清水ひかりさん、三瀬はるかさん

三瀬さん 英語は最初、学校模試で最下位になるほどできませんでした。それが単語ゲームや国際交流をするうちに楽しくなって、勉強するようになり、高3最後の模試では英語で校内1位を取れたんです。看護師を目指しているので、医療現場でも英語を使ってがんばれるよう、挑戦することを忘れずに努力していきたいです。

た。でも先生の授業で英語を楽しいと思えたし、海外のことにも興味をもったし、もっと英語力を伸ばせるとも思いました。進学してからも全力で取り組みます」

なお、加藤先生はほかのクラスでも卒業前に英語プレゼンを行っており、そこでも生徒の成長に泣きそうになったのだとか。そして安易なレッテルを貼りにくく、と改めて思ったという。

「生徒自身も『英語ができない』とよく言うんですよ。でも実際は計り知れない可能性を秘めている。だからこそ『ちょっと誰かの力を借りたらできるようになること』を、周りの大人がいかに伸ばしてあげるかなのだと思います。生徒のなかに自信が芽生え、自ら何かに挑み始めたのを目にする、嬉しくなります」

挑みたいことは加藤先生にもある。いざれ大学院に通い、授業の実践と理論を結びつけ、地元へ広く還元することだ。

「大それたことですが、愛媛の英語教育のためにできることをしたいんです。だから、最後に生徒に伝えたことは、僕自身に言い聞かせた言葉でもありました」

卒業を控えた生徒たちに、加藤先生はこんなメッセージも贈っていた。何もしないほうが楽かもしれないけど、その居心地のよい場所から飛び出してみよう。その先で出会える宝物がきっとあるから。

「Try new things!」

授業作りのポイント



英語を使ってコミュニケーションを取ったり、異なる考えにふれたりする楽しさを感じてほしいです。また、自分で考えて行動し、自己調整しながら成長することも経験してほしいと思っています。「楽しい」「やりたい」を原動力に、目的をもって物事に挑み、よりよいあり方を目指してほしいのです。

Point.1 /

英語を使う 楽しさ

初期はaccuracy (正確性)よりfluency (流ちょうさ)を優先し、間違いを歓迎。国際交流を通して、実社会における英語のコミュニケーションの必要性和楽しさも味わってもらい、そのうえでaccuracy (正確性)も高める。

Point.2 /

生徒が考え 意思表示

生徒がトピックを語り合うワーク、教科書のリテリング、テスト問題の議論など、生徒が自分で考え、人に伝えるための構成も練り、発信するという活動を重視。アウトプットへの自信を育み、表現することや人との関わりの楽しさも伝える。

Point.3 /

思考の サポート

「自分で考えよう」と促すだけでは、生徒は困惑する。だから、AREA (主張→理由→具体例・根拠→主張)の型や、マインドマップのワークシートなどで、生徒が考えを深める・広げるための手法を伝え、活動に取り組む。

Point.4 /

傾聴からの 足場かけ

面談を含む生徒との日々の会話や、授業のワーク (挑戦したいことをまとめるワークなど)を通して、生徒一人ひとりが「英語でどんなことをしたいか」を聞き出して把握。やりたいことに向かうための足場となる学習方法を提示する。